

ブ ラ ッ ク ・ パ ワ ー

——黒人文学の根源として——

安 部 大 成

I

1959年3月、ニューヨーク市で米国アフリカ文化協会主催による第一回アメリカ黒人作家会議が開かれた。この会議での研究報告を収録した*The American Negro and His Roots* には11人の作家が四つの分野（1. 黒人作家の基盤、2. 黒人作家とアメリカ社会、3. 黒人作家の創作態度、4. 黒人作家と出版界）に分れて所見を述べている。この中で特に2と4はストックレイ・カーマイケル *Stokely Carmichael* やフロイ・マツキジック *Floy Mckissick* 等によって主唱されているブラック・パワー、つまり、黒人の総力を結集して、政治経済力を黒人の手に把握し、黒人共同社会 Black Community の自治、自決権を確保して、アメリカ社会での黒人の力を、まず強化し、白人社会との経済政治上のかけ引きを行う力を強固なものにしようとする運動に見られる白人社会の実体把握と極めて密接な関連性をもっている。

政治的色彩の濃い黒人民話「がちょうどん」*Ole Sis Goose* を比喻に、アメリカ白人社会機構内で作家の仕事をする場合に、黒人作家が直面する社会的障害物の仕組に触れたアーナ・ボンテンプス Arna Bontemps の報告は黒人文学はアメリカの政治、経済制度の強い制圧下にある事実を明瞭にとらえている。

がちょうどん (黒人民話)⁽¹⁾

がちょうどんがすいすいと湖で遊んでいると狐どんは草村に身を伏せた。だんだんがちょうどんが岸の近くへ遊いで来たので狐どんは草村から跳び出して彼女をひっとらまえた。

「へへ、どうだい、がちょうどん、とうとうとつかまえたぞ。お前さんは長いこと湖で泳ぎよったが、とうとうとつかまえたぞ。首ったまをへし折って骨をはじき出してやる。」

「お前さん、待っておくれよ。ちょっと待っておくれよ。お前さんが草村に寝ころがる権利があるように、わたしだって湖で遊ぶ権利はあるんだよ。この湖はお前さんのものと同じく、わたしのものでもあるんだよ。だから、この件を裁判所へもって行って、お前さんがわたしの首ったまをへし折って骨をはじき出す権利があるのかどうか確かめることにしようよ。」

そこで二人は裁判所へ向った。がちょうどんは歩けるからつぶやいた。

「わたしが湖で遊びじやいけないうちにお前さんて、どあつかましいいわね。ここは自由の国なんだよ。ふん！ このことを裁判官さんにいっつけてやるんだから。」

二人が裁判所に着き内へ入ると、がちょうどんはあたりを見廻した。シェリフが目にとまった。彼は狐であった。彼女は裁判官が狐、弁護士達も狐、陪審員も皆んな狐であるのに気づいた。

そこで彼等狐達はがちょうどんを裁判にかけた。狐達は彼女を有罪と決め、処刑し彼女の首の骨をはじき出してしまった。

さて子供達よ。よくよく聞いておいておくれ。裁判所の連中がみんな狐達であって、お前達がただたんなるがちょうどんであつたら、お前達、力のない黒人達にはあまり公明正大な処置はとられはしないんだよ。

素朴な表現をすれば、狐に占有されてしまっている司法、行政機関等から

狐を追い払い、がちょうをしてこの地位を占めさせ、がちょうの様々な権利を防禦し、黒人共同社会、湖を狐による一方的侵害から守らんとするのがブラック・パワーの狙いであり、がちょう領域の経済機構をがちょうの手で把握し、狐の経済的不平等競争と搾取よりがちょうの利害を守り、がちょうの日常生活を経済的荒廃から解放しようとするのが人種平等会議 Congress of Racial Equality のロイ・アイニス Roy Linnis や全国都市連盟 National Urban League のホイットニー・ヤング・ジャー Whitney Young Jr. 等の主唱する経済分離と呼ばれる、黒人経済防衛の主張であろう。

では黒人作家は狐の如何なる禍いを蒙っているのであろうか。

ボンテンプスはこの民話のモラルを強調しつつ黒人作家と白人出版界の関係を次の如くとらえる。

「編集者は復々にして狐になり勝ちであり、出版社も恐らく狐に変貌し得る。書評者、その書評を掲載する出版元も狐であり、市場に書物を出す出版業者、書店、図書選定委員会、さらに大半の読者も皆んな狐である。我々多くのがちょうが判決を下され、処刑され、骨を抜き取られてしまわなかったのは驚嘆に価すべきことである。⁽³⁾」

彼はここで作家の作品発表、秀れた業績を残した黒人の伝記執筆、企画ものへの黒人作家の参加等に人種差別が行われて来ている気配が極めて強いことを指適する。1920年代の黒人文芸復興期と呼ばれる時期に黒人作家の作品がハーバース、ヴェイキング、ポニー&リヴァライト、ハップ社等の米国主要出版社より出版された事は彼の文学生活をふり返って見ると、こうした機会は予想外に早く訪れたものであると歓迎する一方、こうした主要出版社から特定の分野に属する著作の発表には機会が閉ざされていて、黒人作家は弱少出版社に依存する外ない、と力説する。

ボンテンプスはこの機会の制限を黒人作家の肌の色に基づいて行われるものであるとは考えていない。むしろ、黒人である故に、当然問題とされるべきものに黒人作家が触れ、黒人の立場から検討を加えるであろう、問題の提

起に制限が課せられる、という風に考えている。この点を掘り下げたのがジョン・O・キレンズ *John O. Killens* の報告、*Opportunities for Development of Negro Talent* である。

彼は黒人作家が出版社、ジャーナリズム、TV、映画等のマスメディアに創作発表の機会が制限されるのは作品のテーマ、内容によってそうされるのであるという。この制限は作品のテーマ、内容に対する差別であって、彼はこの差別行為を出版界、マスメディアの作品検閲という形でとらえている。この作品、著作の検閲によって白人社会にとって好ましくないものが排除されて未然に葬られる。

白人社会にとって好ましくないものは兩人種の間関係が白人の社会通念にもとるもの、社会、政治、経済機構内での差別の仕組を暴露するもの、人種不正問題の解決の展望が好ましくないもの等であって「作家がリトル・ロック、モントゴメリイに関するTVストーリーや黒人が背景をなす恋愛ものを手渡せば」作家が白人であろうと黒人であろうと問題なく、こうした作品は「十中八九まで受け入れられたり、出版されたりはしない。」⁽⁴⁾ この作品検閲が存在するため、黒人作家の内面には「自己検閲」self-censorship 意識が植えつけられる傾向があり、作家自身の創作能力の欠如は別として、創作意欲と創作能力発展を妨げる要素となっている、と彼は指適する。

では今日まで発表されて来た多くの黒人作家の作品や劇作は一般に如何なる点でこの白人出版界の検閲をまぬがれて来たのであろうか。

ロフテン・ミッチェル *Loften Mitchell* が彼の報告 *The Negro Writer and His Materials* でこの点を明らかにしている。

彼によれば、黒人の創作力は奴隷の時代から、白人達の感情を害したり、彼等の怒りを招いたりしない様に充分に気を配りつつ何かを主張するという形態を取ってものの表現をして来ており、こうした表現は早くから黒人民話や霊歌に姿を現わしている。

黒人民話の動物物語は力はないが知恵のあるうさぎが熊や犬や狐、狼を巧

みにたぶらかしてその目標を達成するという話が多い。この場合、うさぎは黒人になぞらえられていて、強力な白人の制圧下に自滅することなく自由を願って生きのびるさ中に身につけた、制圧を秘かにすり抜ける防禦行為、これに気づかぬ白人への秘かな嘲笑と楽しみがうさぎの振舞に表現された。又、過酷な地上での生活を憂い、天国での救済と幸福を願った黒人霊歌も現世の不正に対するプロテストが秘められており、時には北部への逃亡の合図として歌われ、天国は北部、北部はやがて奴隷解放を意味するものとなったりした。

この白人社会の激怒を誘発することなく、黒人の本心を表現しようとする二重構造を持つ創作は今日も根強く存在し、「抗議小説の時期ですら、社会は黒人作家に特定の用語を口授した。つまり、『黒人と白人の連帯』が常に表現されていなければならなかった。黒人問題の解決にあたって、いつも黒人を助けてくれる『良い』白人が作品に登場していた。⁽⁵⁾」のである。

抗議小説の代表作、リチャード・ライトの *Native Son* (1940)、マーク・トウェインの *The Tragedy of Pudd'nhead Wilson* (1894)、ハーマン・メルヴィルの *Benito Cereno* (1856) と並んで米国の人種問題に涉わる三大暴力小説といわれるこの小説にさえ、白人娘メアリイの身体を解体焼却した黒人青年ビガーを積極的に弁護してくれる白人ヒューマニスト、弁護士マックスが重要な役割を果たす。両人種間の人間の愛と性的問題を描いた実存的小説、ジェイムス・ボールドウィンの *Another Country* (1962) にも白人女レオナを非常にサディステックに痛めつけ、恥かしめて精神病棟に追いやる黒人ミュージシャン、ルーファス・スコットに同情し、彼を助けんとする多数の白人が登場する。

これは黒人が正義よりも同情と恵み、憐れみをうけるべきものであるという、白人社会の黒人に対する偏見、ステレオタイプを満足させ、白人の家父長的温情主義を満足させるのである、とロフテンは指適する。

この黒人の作品の二重性を生む要因は勿論、黒人作家が白人と自己を同一

視せんとする場合は別として、白人社会の黒人に対する態度にあり、この社会の人種小説の趣好と出版界の検閲基準の正体は白人作家の黒人を扱った作品を検討すれば一層ははっきりする、とロフテンもミツチェルも主張する。

彼等は数多くの作品を取り上げ、そこに一貫した次の様な白人の黒人イメージが存在することを明らかにしている。主人に忠実な召使的黒人、不幸を気にせぬ陽気な、コミカルな黒人、激怒に見舞れた哀れむべき未成熟者としての黒人、白人を慕い、白人を熱烈に求め、黒い身体に苦悩する黒人等。

こうした黒人イメージが産出される原因はどこにあるのか。ミツチェルはこの会議に加った黒人女流作家アリス・チャイルドレスの持論を要約して次の如く判断している。

「簡単に云えば、社会に広く流布した白人優越主義観念が白いアメリカ人の大多数のものに、扁見、侮辱、憐れみの情なしには、黒人を描くことを不可能に⁽⁷⁾させて来たのだ。……」

黒人作家達がアメリカ白人社会の人種主義者的態度が社会機構に組み入れられていて、彼等の創作活動の障害となっていることを見きわめ、黒人出版企業の育成を不可欠であると主張した1959年をふり返ってみると彼等作家の社会批判の眼が如何に鋭いものであったかが分る。この時期は人種差別廃止運動が極めて盛んな時代であった。そして、この運動は成果を上げていた。

1957年8月、市民権法案が下院を通過した。これにはアメリカ市民の投票権を守り、強化する条項が取り入れられていた。この年、アーカンソー州リトルロック市のセントラル・ハイスクールの人種統合を促すべく、連邦軍がこの地に派遣された。又、マルチン・ルーサー・キング・ジャーを中心に南部キリスト教指導者会議 Southern Christian Leadership Conference が形成され、差別廃止運動は大衆を結束させていた。

1958年、ハーワード大学政治学部長であり、マイヤデルの大著 An American Dilemma (1944) の共同研究スタッフであったラルフ・パンチが国際連合の要職についた。

1960年、アイゼンハワー大統領は市民権法案に署名した。学生非暴力協調委員会 Student Non-violent Coordinating Committee が形成され、非暴力精神にもとづく差別廃止運動が組織化された。

1961年、黒人であるクリフトン・R・ホワートンはノールウェイの米国大使に任命され、同じくジェイムス・B・パーソンはシカゴの連邦地方裁判所の裁判官となった。各州連合通商委員会 Interstate Committee が州間交通機関、施設の人種差別廃止の命令を出すや、南部の差別法の正体を確めるべく人種平等会議、COREは黒人、白人の混合班からなる Freedom Riders を南部へ送り込んだ。

人種差別の壁は次々と崩されて行くかの感があり、セイントクレア・ドレイク *St. Clair Drake* と、ホラス・R・ケイトン *Horace R. Cayton* は彼等の社会学書 *Black Metropolis* (1945) の1962年版に加えた「ブロンズヴィル 1961」*Bronzeville 1961* でこの時期を次の如く述べている。

「アメリカは繁栄の時代を体験しつつあり、黒人達は人種統合の時代に生きている。⁽⁸⁾」

この人種問題の解決に希望の光が輝き始めたかに見える時期に、政治問題の背後にある人間の問題に眼をすえていた彼等作家達の一人ジュリアン・メイフィールド *Julian Mayfield* は云う。

「人種統合が選挙、住宅、教育、就職といった分野で完全な市民権を獲得するという意味ならば、これは称賛されるべきであり、又、実際励みとなるものである。」⁽⁹⁾だが、こうした統合によって、一步白人社会の内側に足を踏み入れると、白人社会の持つ生活様式、価値観、信念、モラルとの接触を持つことになる。従って人種統合の持つ意味のもう一つの側面、「アメリカのイメージと黒人が自己を同一視する。」という問題になると極めて深刻な事態が生ずる。というのはアメリカのイメージ *American Image* といい、アメリカの主流 *American Mainstream* といい、アメリカの夢 *American Dream* といい、様々は民族を背景とするアメリカがこれら諸民族を統合したこのも

のの正体が黒人にとっては問題だからである。

「この国での長くして残酷であった黒人の歴史を通じて今日まで、黒人はアメリカの夢の最も熱烈な追求者であった……、彼がこの夢を手握ることが出来るとするなら、彼は多勢の冷笑的白人が彼の身に加えるおびただしい虐待をも恐れず、誇りをもって歩むことが出来たであろう。アメリカの夢の追求が非常に熱烈であったため、黒人指導者達は戦争の正体が何人であるかに全く関心なく、どの戦争にでも『我々の若者を召集してくれ、我々の若者にやらせてくれ、そうすれば彼等はアメリカ人としての値打があることをきっと証明します。』と呼んで、民族中、最も力強い彼等の息子達を提供して来た。」⁽¹⁾ところがこの黒人を虜にしていたアメリカの夢の正体が何人であるかがぼつぼつ黒人大衆には分りかけて来た。

「私は軍隊の人種統合がなされたことなんかどうだっていい、この次から私は一体どんな戦争に自分の息子が取られて行くのか知りたい。」⁽²⁾と朝鮮戦争で息子を失った或る黒人の母の叫びを耳にしたメイフィールドは黒人大衆のアメリカの夢からの覚醒を見て取っていた。

ジョン・O・キレンズは短篇小説 *God Bless Amrerica* (1952) でアメリカの夢を追って朝鮮戦争に加わる黒人青年とこの人種戦争を激しく批難し、戦場に向う彼の不運を心から嘆く黒人娘を描いて黒人間にアメリカの夢に対する疑念が拡がりつゝあった現実を取えている。

勤強、儉約の精神と個人の創始力をもとに、無限の可能性を秘めた自由の国土アメリカで、自らの潜在能力を充分に発揮し、己れの欲するところのものを進取する。そうすることによって幸福で一層豊かな生活を確保するというアメリカの夢はアメリカ白人にとって開かれたもので黒人には閉されたものでありそうだ。それは白人優越思想に侵蝕されたアメリカ人のイメージに映った黒人を見ればはっきりしそうだ、とジュリアン・メイフィールドはいうのである。

アーナ・ホントンプスは黒人作家が依存して来た白人出版界の出版状況に

批判の眼を向け、ジョン・O・キレンズは人種問題のあつかいに関する出版界の検閲、これがもたらす作家の自己検閲の傾向をとらえてその焦点をしぼった。そしてフロテン・ミッチェルは兩人種間の人種関係の作品に白人優位の設定が強く見られることに注意を促し、白人優越主義の文学作品への侵透を指適した。そしてジュリアン・メイフィールドは白人社会の主流なるものに対して強い疑念を投じた。これは文学の分野で黒人が白人優越主義の色彩が強い白人文学というアメリカ文学の主流に訣別を告げんとする傾向が統一的に強まって来ていることを意味するものといえよう。それは単なる訣別ではなく、黒人の総力を結集して黒人文学の陣営の戦列をととのえ、黒人の創造力をゆるぎないものにせんとするものである。この動きは1960年中盤に抬頭した解放の政治学、ブラック・パワーのアメリカ主流のとらえ方、(それはブラック・パワーがより具体的にとらえているが、) 運動の方向と同一路線にあることは意義深い。ブラック・パワーはアメリカの主流を荷負うものは白人中産階級であると規定する。そしてアメリカの夢はこの階級に独占されていて黒人のものであったことはなく、この階級の価値観は人種主義者の性格と物質主義からして人間性に欠けるものであり、従ってこれに同化することは自らの人間性を荒廃させるものであるとする。ここに黒人の政治運動と文学が合流し、人種主義に腐蝕されているアメリカの人間性回復の役割を果たす可能性が強く予想されるのである。

注 (1) Langston Hughes and Arna Bontemps, *The Book of Negro Folklore* (New York, Dadd, Mead & Company, 1958) p. 13.

(2) See Roy Innis, "Separatist Economics: a New Social Contract," in William F. Haddad and G. Douglas Pugh, eds., *Black Economic Development* (New Jersey, Prentice-Hall, 1969).

(3) Arna Bontemps, "Ole Sis Goose," in American Society of African Culture, ed., *The American Negro Writer and His Roots* (New York, American Society of African Culture, 1960) p. 52.

(4) John O Killens, "Opportunities for Development of Negro Talent," *Ibid.*, p. 64.

- (5) Laften Mitchell, "The Negro Writer and His Materials," *Ibid.*, p. 57.
- (6) Kenneth Lynn, "Violence in American Literature and Folk Lore," in Hugh Davis Graham and Ted Robert Gurr, eds., *Violence in America* (Signet Book, 1969) p. 233.
- (7) Mitchell, *op. cit.*, p. 59.
- (8) St. Clair Drake and Horace R. Cayton, *Black Metropolis*, Vol. 2 (Haper Torchbooks, 1962) p. XV.
- (9) Julian Mayfield, "Into the Mainstream and Oblivion," *American Society of African Culture, ed., op. cit.*, p. 30.
- (10) *Ibid.*, p. 30.
- (11) *Ibid.*, p. 31.
- (12) *Ibid.*, p. 30.

II

1960年を前後する時期はメイフィールドもいう如く「道義の雰囲気」がかもし出され、「人種主義は実際、崩壊しかけたかの如く」感じられた。だが1960年の中盤にさしかかって南部白人社会の人種主義は SNCC, CORE, SCLC を中心とする非暴力運動に対し総反撃をかけてその残酷な正体を現わした。

1963年、キングが最っとも人種隔離の厳しい街と指定したアラバマ州バーミンガム市に彼の導く差別抗議のデモを導入するや、公安委員長ブル・オコーナは放水車と警察犬を使ってこれを鎮圧した。NAACP のエドガー・エヴァンズがミシシッピ州で殺害され、次いでバーミンガム市の黒人教会が爆破された。この事件で四人の黒人少女が死亡したが南部に於ける人種隔離別への抗議運動が暴力による鎮圧、報復をうけ始めると、住居、就職差別によってスラム街の荒廃した生活状況に押し込められていた北部黒人の下層集団を一層激怒せしめ、「眼には眼を」と説教して来たブラック・モズリムの当時のスポークスマン、怒れるマルユムの声を高めさせ、又、SNCC, CORE

をしてキングの指導方針より訣別せしめた。そしてアメリカは1964年から1967年に至る連続四夏季に渡る黒人大暴動に見舞れることになった。

1967年7月「暴動対策委員会」National Advisory Commission on Civil Disorder が大統領命令によって設けられ、暴動の原因究明と将来の対策が検討され、この委員会は翌年3月、多くの学者、専門家によって執筆された「暴動対策委員会報告書」を出したが、その第十六章「都市の将来」はアメリカ白人社会の心胆を寒からしめるものである。これは黒人の都市集中化と人口増加、白人の郊外地域への移動がますます激化し、1985年までには、このままで進むと両人種の地域的、経済的人種両極化（一方が豊み、他が貧困状態にある）を定着化させ、両人種間の敵対関係が深刻なものとなり、アメリカの主要都市は一触即発の人種暴動の危機を常時はらんで、準戒厳命下の生活が強いられるであろうことを予想している。

このアメリカ全土の治安をゆるがし、国民生活の安全がおびやかされる可能性が濃くなって、初めて白人権力社会は正直にアメリカの人種問題に涉る真実を認めざるを得なくなった。この報告書に接して、フロイ・マッキジックは「我々はまさに真実に到達しかけんとしている。白人達が初めて、『自分達は人種主義者である。』⁽¹⁾と語った。だが、これを認めたのは極少数者にすぎない。人種偏見と組織的差別によって、黒人からあらゆる機会を奪い、彼等をスラム街に閉じ込め、この地上での生活を荒廃と腐蝕の中に送らせることを強いたのは様々な白人の政治、経済、社会機構、白人社会そのものが行ったという事実を「暴動対策委員会」は認めたが、これは「白いアメリカ人が決して十分に理解していないこと——しかし、黒人は決して忘れることの出来ないもの——」⁽²⁾であるというさらに深刻な事実をも同委員会は認めざるを得なかった。

白いアメリカ人が何故、自ら行って来た人間的、社会的不正を理解出来ないのであろうか。この解答は明瞭である。それは彼等が黒人を彼等と同じ人間であるとは考えていない、又は考えたくないからである。

自由、平等、機会均等を柱とする民主主義の精神、所謂、アメリカの信条とアメリカの夢は本来合致するものである。しかし、これが合致するのは黒人を除外して初めてそうなる。ジョン・Z・ディロリアン John Z. Delorean (ジェネラル・モーターズの副社長) は経済学者の立場から、1857年の或るオレゴン州の新聞記事 (これは1969年2月27日の *New York Review of Books* に C. Vann Woodward が引用したものであることが脚注されている。) を一例に白人社会の黒人除外の原因を経済自由競争よりの黒人排除にあると見ている。

『オレゴン州は白人のための土地である。我々の間に黒人を奴隷として存在させることは許さないが、我々は正当にして有力な理由にもとずいて、彼等が自由黒人の浮浪者となって我々のところへやって来ることを禁止する。』

これらの『有力な理由』の中には自由黒人は白人に仕事、企業の所有権、土地を手に入れる競争を行うであろうという広く流布した恐怖感があったのである。⁽⁴⁾ 彼はさらにフランスのエッセイスト、アレクセ・ド・トケヴィル Alexis de Tocqueville が1835年のアメリカを訪問して印象づけられたという一節を加えている。「人種偏見は奴隷制の存在する諸州よりも奴隷制を廃止した諸州に於て一層強力であるように見える。」⁽⁵⁾ それは彼の見解からすると黒人との自由競争を恐れたためであり、この恐怖は奴隷制下に黒人を置くことによって静められていたということなる。しかし、その背後に横たわるものは人種主義であって、下等と考える人種と自由競争を行いたくないことを意味する。これは奴隷制度を持たず、従って偏見と差別がない様に思われた北部白人にも同じく人種主義の侵透が見られる。南部黒人が第一次、第二次大戦による軍事産業の労働力として、又、北部を約束の地と夢みて、不況と冷酷な差別の地、南部を逃れて北部に流入し始めると、この事実が次第にはっきりして行った。

「黒人の大集団が彼等のまっただ中に流入して来た事は……合衆国の北部白人を厳しい試練に晒した。彼等の大多数はその時になって初めて、彼等も

独自の人種偏見を持っており、彼等は黒い同胞を平等な人間として受け入れる用意のなかった事に気がついた。⁽⁶⁾」黒人社会学者ジョン・ホープ・フランクリン *John Hope Franklin* はこう指適している。

「黒人を平等な人間として受け入れる用意がない」のは彼等の依って立つアメリカの信条、アメリカの主流をなす中産階級の価値観、信条、生活様式から黒人を初めから除外しているためである。

社会学者、ヴァンス・パッカード *Vance Packard* は *The Status Seekers* (1959) で彼の知人である或る社会学者が階層分化の研究に際して気づいた興味ある一例を述べている。この学者は大学生達に次の社会的属性を持つ人物を適切な社会階級に位置づける様要求した。

「彼はインディアナ大学出身でオハイオ州立大学で法律の学位を得た。彼の父は小企業を営む高校出身者であり、母は二年の大学教育を受けている。彼は1958年型のビュイックに乗り……自分の法律事務所を持っている……年間1万2千ドルの収入があり……二人の子供は大学生である。⁽⁷⁾」

これだけを聞き終えると、この男は中産階級上部にあることが直ぐ分る。その上、この男は自分の両親の社会的地位をしのいだ、いわばアメリカの夢の具現者である。ところが学生達はこの男を下層階級上・下、中産階級上・下、上流階級上・下、六階層のいづれに位置づけるべきか非常に当惑した。というのは教授が最後に「この男は黒人である。」と付け加えたからである。彼等ははっきりした社会的地位を持っている黒人を、この社会的地位を基とする階層のいづれにも位置づける用意が全く出来ていないのである。黒人は別問題であると人種主義者の如くはっきりといい切らぬまでも、こうしたためらいの中に、これらの学生達に人種主義なるものの侵透が歴然と見られるのである。

パッカードは、アメリカ人の心を形成する上で学校教育と学校での人間の接触のあり方が重要な役割を果すが、このアメリカの教育なるものが、実は階級意識にもとづく排外意識を育てる張本人である、と力説している。

「アメリカの公立学校は民主主義を育てる力となっていると、よくいわれて来ている。公立学校と私立学校を比較すれば、それは疑うべくもない⁽⁸⁾。」だが、民主主義的であるのは小学校レベルであって、中学校に近づくにつれて級友、遊び仲間の出身社会階級が問題にされてくる。礼儀上は別として付き合いがいい仲間とそうでないものが明瞭になり始めてくるのである。この傾向は中学校になると遊び友達は異性間とのデート相手と変化するために適切な階級出身者を友人に選ぶことによって強化される。高校になると上流階級の子供は私学に向う傾向があり、公立高校の生徒集団は中産階級上部のもので占められることになり、下層階級出身者が退学し始める。かくて「アメリカの公立学校には中産階級上部のものの考え方が支配的であるばかりか——気づかれぬかも知れないが——この階級が包含する諸価値を強化するための精力的な努力がなされている。」これがアメリカの主流なるものの正体なのである。白人中産階級に黒人は最初から含まれていない。大学生が（恐らく社会科学を学んでいる学生達らしいが）黒人の処遇に当惑するのは当然のことである。「ヒューマニティを教える大学にヒューマニティの精神なく……⁽⁹⁾」と黒人問題に関してアメリカの大学を批判したルック誌の編集人アーネスト・ダンバーの憤慨は納得するに難くない。

注 (1) *Newsweek* (March 11, 1968) p. 19.

(2) *Report of the National Advisory Commission on Civil Disorder* (Bantam Book, 1968) p. 2.

(3) *Ibid.*, p. 2.

(4) John Z. Delorean, "The Problem," in William F. Haddad and G. Douglas Pugh eds., *Black Economic Development* (New Jersey, Prentice-Hall, 1969) p. 8.

(5) *Ibid.*, p. 8.

(6) John Hope Franklin, "Introduction: Color and Race in the Modern World," in John Hope Franklin ed., *Color and Race* (Boston, Houghton Mifflin Company, 1968) p. xiii.

(7) Vance Packard, *The Status Seekers* (Giant Cardinal, 1961) p. 40.

(8) *Ibid.*, p. 200.

(9) Ibid., p. 201.

(10) Ernest Dunbar, "Memo from the Ghetto: The Dispirit of '67," in *The Asia Magazine* (November 19, 1967) p. 30.

III

ブラック・パワーはこのアメリカ中産階級の生活様式、諸価値観、信念、ものの考え方をどの様に見ているのであろうか。それは白人社会にゆき渡った白人優越主義の網の中に黒人がその人間性を歪曲された取でとらえられ、白人に隷属する黒人像が創り出され、黒人の人間的尊厳が汚されることに対して、文学の分野で激しく抵抗している黒人作家の創作活動に多大の影響力を及ぼすものとして検討するに値する。

パッカードは前述の書でエール大学の社会病理学者ジョン・ドナルドが南部で兩人種間に存在する社会的障壁について調査した際、或る白人女が結婚前のパートナーとの接吻がもたらした奇妙な体験を本人より耳にして述べたことに触れている⁽¹⁾。

彼女は白人の青年を愛していて、別れの際、熱烈な接吻をした。これを傍で見ていた年配の女がこの行為を厳しく戒めたという。理由はそうした熱烈な接吻は彼をして黒人女を求めに黒人街へ行かせることになるというのであった。パッカードはここに南部の白人男が女性に対して持つ二つの態度を指適する。だが、これは南部の白人男に限定する必要はなく、北部の白人男も同じである。ミシガン州の小さな町で少年時代を送ったマルナム X がその地での兩人種間の性の交りを明らかにしている⁽²⁾。又、問題は白人男の二重態度にあるのではない。ここには白人の宗教とセックスにまで根を拵げている根深い人種主義の働きが見られることである。パッカードは同じ箇所では白人の男は黒人の女を誘惑的 (seductive) と感ずる傾向を指適している。白人の女が魅力的 (attractive) であるに反して黒人が墮落的という意味を含む seductive と感じられるのは何故であらうか。

ロジャー・バスタイド *Roger Bastide* はこれに関して一つの見解を述べている。彼によれば白人女を純潔である白い聖母のイメージ、黒い女を肉欲をそそらせる悪魔のそれにとらえ、兩人種間のセックス感情に白人高等、黒人下等の観念を植えつけるに至ったのはヨーロッパの植民地主義をヨーロッパの宗教が正当化することによってヨーロッパ人の良心を安定させる役割を果す過程で行われたと見る。これは兩人種間の接触による性的交わりを規制し黒い女の魅力から白い男を（この逆からいえば黒い男の魅力から白い女を）宗教的色彩の濃いモラルの上から防衛するにはさらに美学的性格をもつ理由づけを必要とし、黒い女を醜いものと納得させるにたる美的表現がなされて来た、と彼は主張する。

人種主義はこうした宗教意識、美意識、セックス感情と相互に補強し合っ
て極めて執拗な力をもち個人の間深く侵透していった。

ストックレイ・カーマイケルとチャールズ・ハミルトンはこの人種主義の持つ重大な機能を的確に取らえ、「人種主義は単に人種の差異に基づく人種排斥を行なうのではなく、他人種を服従させ、この服従状態を保持する目的を持って異人種を排斥する。」と述べている。

ブラック・パワーは白人中産階級と人種主義を不可分のものとして見ており、この中産階級がとりもなをさず様々な社会、経済、政治制度に固着した人種主義の背骨となっていると判断する。

「この階級は——全体として——人間性に関して育つ見込みのある良心は持ち合せていない。この中産階級の価値は物質的増大に基づいていて、人間性の発展には基づいていない。この階級の価値は結局はきれいに並んだ並木のある郊外地域におさまり込んだ、世を避けた小さな閉鎖的社会集団を支えるだけである。この階級は自由な、競争による社会を肯とすると口にはしながら、黒人達全体に競争の機会を与えることを強引に、残酷なまでに拒絶する。」

だから、ブラック・パワーはこの階級と同化するという目的を持たない。

彼等は黒人意識を高め、洞察力を鋭くして、人種主義のワナから自らを解放すると共に、これら白人の手に握られている黒人共同社会の政治、経済機構を黒人の総力をあげて、自らの手に取りもどそうとする。ブラック・パワーは人種統合の背後にあるものに眼を置えている。それは人種主義の荷負い手白人社会の主流をなす中産階級の領域に黒人を近づけ、この階級の価値観に同化させることによって黒人を白人社会の支配下に置き、黒人の人間としての尊厳、創造力、人間性を根こそぎにする危険である。この判断は人種主義の固着した政治・経済の仕組みそのものの性格に対する洞察に由来する。⁽⁶⁾

ロフテン・ミッケルは「人種総合はアメリカで進められて行くであろうが、黒人であることの根となるものが白人社会によって跡形もなく抹殺されるのではないかという恐怖は底知れぬものである様だ。」⁽⁷⁾とブラック・パワー出現の約10年前に懸念したが、ここに人種主義を除去し、人間の自由と尊厳を守り続けて来た、黒人の偉大な人間性を一層力強く息吹かせるブラック・パワーの精神が誕生しているのである。

だが、その前途は平易なものではない。まず文学の分野で黒人の精神的遺産、黒人の根を腐蝕させる様な作品が、ブラック・パワー抬頭の時期に出現している。白人作家ウィリアム・スタイロン *William Styron* の *The Confessions of Nat Turner* (1967) がそれである。

ナット・ターナーは周知の如く1831年、少数の奴隷をひきいてヴァージニア州サーザンプトンに奴隷反乱を巻き越し、黒人は奴隷であるよりも、自由を獲得するためには、生命を捨てることを恐れぬ人間であることを身をもって明らかにし、当時の奴隷諸州をゆるがした、黒人の英雄である。このナット・ターナーを白人女の肢体の魅力に心身まで虜にされた白人への内的隷属性の権化としてスタイロンは描き、黒人作家の激怒を買った。この作品は白人社会に人気を呼んでいることが指適されているが、これは白人社会に於ける黒人に対するステレオタイプが健全であることを示すと共に、白人優越主義の禍いをうけた黒人の存在がその作品の社会的基盤ともなっているといえ

るが、スタイロンが表現するものは、まさに黒人作家が警戒していた黒人の根に対する除根的働きを及ぼすものであろう。この作品が発表されるや、第一回黒人作家会議に加っていたジョン・ヘンリック・クラーク *John Henrik Clarke*、ジョン・O・キレンズ *John O. Killens*、これにカーマイケルとの *Black Power* (1969) 共著者であるチャールズ・ハミルトン *Charles Hamilton* をも加えて10人の黒人作家がスタイロン批判に出ているが、これに関する検討は次回に譲りたい。

- 注 (1) Vance Packard, *The Status Seekers* (Giant Cardinal, 1961). p. 145.
 (2) Malcolm X, *The Autobiography of Malcolm X* (Penguin Book, 1966) pp. 111, 112.
 (3) Roger Bastide, "Color, Racism, and Christianity," in John Hope Franklin ed., *Color and Race* (Boston, Houghton Mifflin Company, 1968) p. 41.
 (4) Stokely Carmichael and Charles V. Hamilton, *Black Power: The Politics of Liberation in America* (Pelican Book, 1969) p. 61.
 (5) *Ibid.*, p. 54.
 (6) *Ibid.*, p. 65.
 (7) Loftin Mitchell, "The Negro Writer and His Materials," in American Society of African Culture ed., *The American Negro Writer and His Roots* (New York, American Society of African Culture, 1960) p. 60.

補 注

1957年～1961年の黒人関係の出来事はC. Eric Lincoln, *The Negro Pilgrimage in America* (Bantam Book, 1967) の Chronology を参考にした。